



消えた調査隊

「ミツオさん……。」

「え？ なんですか？ おかあさん。」

「そのアリスに上陸する一員に、このわたしもくわえられたのよ。」

やがて白鳥号のゆくてに、この白鳥座61番星系の二つのかがやかしい太陽がせまってきた。

その二つの太陽は、かりの名をA、B。アリスの住民たちは、その色あいから、Aをオーロ、Bをクープロと名づけていた。エスベラント（万国共通語）で、オーロは『金』、クープロは『銅』の意味である。アリスは、その『オーロ』の第二惑星だった。

白鳥号は、ついに、アリスから十万里の点に到達すると機関をとめ、アリスのまわりをまわりつづける人工衛星となった。

調査隊は、そこからロケットでアリスにむかうのである。

「いよいよ出発ですね！ どうか、ぶじて帰ってきてください。おかあさん。」

ミツオは、スバル夫人の手をかたにぎった。スバル夫人は、やさしくその手をにぎりかえすと、力よく答えた。

「だいじょうぶよ、心配しなくても……。隕石や宇宙線にさえ耐えるようにできている体は、すこしぐらいの攻撃をくわえられても、びくともしないんだから……。船との連

